

「共生のひろば」に参加して

武田義明（神戸大学大学院人間発達環境学研究科／神戸大学サイエンスショップ）

今回で第7回となる「共生のひろば」ですが、参加したのは初めてでした。口頭発表15件、ポスター発表37件で、しかも小学生からシニアにいたるまでの幅広い参加者でした。内容も里山管理や湿原の保全などのような保全活動、ヒゴクサキリの生活史やヒルミミズなどの緻密な観察、農産物の山の芋の普及、十脚類の化石、環境教育、昆虫食など大変ユニークな発表もあり、テーマも幅広くありました。特に、高校生の発表はいかに人を引きつけるかという工夫を凝らし、大変面白く聞かせていただきました。



さらに、それぞれの活動が精力的に行われているということがよく伝わってきて、非常に中身の濃い発表だったと思います。また、市民の研究とはいえ、かなりレベルの高いものもありました。多様なテーマと多様な市民がこの「共生のひろば」の魅力だと言えるでしょう。

「共生のひろば」の発表においては、人と自然の博物館も市民の自然保全や研究活動を精力的に支援していることがよくわかりました。このように研究機関が市民を支援することで科学への関心が高まり、理解を深めることにつながると思われます。今回、里山管理に関する発表が多くありましたが、単に木を切れば良いというだけではありません。何のためにどういう目的で行うかという目標設定が必要となります。目標はそれぞれの地域に応じて設定しなければなりません。それには専門的な知識が必要となります。今回の発表では人と自然の博物館が支援して目標や管理方法を設定していたと思います。また、調査したデータをどのように解析し、まとめたら良いのかということに対しても支援していたと思います。このような研究機関と市民との協働がこれからますます必要になってくるでしょう。さらに、市民も活動を通じて学習していけば独自に調査・研究活動ができるようになっていくでしょう。さらなる展開が期待できると思います。

私は今、神戸大学のサイエンスショップの室長を仰せつかっていますが、サイエンスショップでも市民の研究の支援を行っています。現代社会は、科学技術が発達し、高度な技術社会となっています。社会では環境、医療、安全などの問題や課題があり、それには様々な知識や技術が必要となり、日夜研究が行われています。そのため、科学技術の進歩と共に高度化し、専門家でないとなかなか理解できないような状況になっています。しかし、専門家でない人も環境問題や社会問題に対して、対応して行かなければなりません。そこで、こうした背景をふまえて「神戸大学サイエンスショップ」は、サイエンスカフェを開催し、市民と専門家との対話を行い科学技術への理解を深めてもらう活動を行う一方、市民が取り組むさまざまな科学・研究活動への支援、地域の学校や社会における科学教育に対する支援などに取り組んでいます。また、大学教育においては、学生、大学院生の自主的な研究活動の支援、課題発見能力、課題解決能力、コミュニケーション能力、プログラムマネジメント能力などを高める支援を行っています。神戸大学サイエンスショップも人と自然の博物館と連携して支援できる体制ができればいいなと思いました。

岩槻館長のコメントで Act locally, think globally という言葉が出てきましたが、まさにそのとおりだと思います。今、地球温暖化や生物多様性の保全が世界的な問題となっており、1992年には「生物多様性に関する条約」が締結され、日本も批准しています。日本ではそれを受けて、

生物多様性国家戦略を策定し、さらに、生物多様性基本法も施行されました。兵庫県では「生物多様性ひょうご戦略」をつくり、神戸市や明石市でも生物多様性戦略を策定しています。この生物多様性保全は世界的な問題ではありますが、実際に保全を行うのは地域です。身近な自然の保全が世界的な生物多様性保全に繋がっていくものと思われます。そのためには地域住民が地域の自然を理解し、保全を進めていく必要があるでしょう。日頃の地道な活動が世界へと繋がるのです。

「共生のひろば」で発表することは、自分たちの研究や活動を報告することだけでなく、住民同士の交流の場となります。お互いにどのような活動をしているのかを知り、理解を深め、それぞれの長所を取り入れることができます。また、同じような問題を抱えている場合は、交流することによって解決の糸口がつかめるかもしれません。活動がそれぞれの地域でばらばらにやっているのではなく、連携して行うことができれば、さらに、大きな力となっていくでしょう。